

The Japan Gazette, p.143 (1880-10-02)

Reports

昨年9時、ブラフ・ガーデンズでは優美な光景が繰り広げられた(今月22日■■■)。ランタンが幾条にも花網状に美しく飾られ、昇ってきた月が全てを明るく照らしたその情景は、「不朽の吟遊詩人 immortal bard」という言葉を思い起こさせた。

ここに腰をおろそう、そして音楽の調べが

忍びよってくるのを聞こうじゃないか。*

大日本帝国海軍軍楽隊と米海軍旗艦リッチモンドの楽隊のコンサートは、後者によるオーベールの《王冠のダイヤモンド》序曲の演奏で9時きっかりに始まった。プログラムは3つの部分からできていた。まず各バンドがそれぞれの作品を演奏し、その後、合同で合奏してフィナーレを迎えた。これらの優れたバンドの演奏を聞く機会はこれまでも多くあったから、今回の演奏について多くを語ることは「蛇足」painting the lily になるだろう。リッチモンドの楽隊はかれらの傑出した知性を演奏で示したが、それに対して日本の楽隊は、特に楽隊のメンバーが指揮した時に軍隊的正確性(この言葉を海軍軍楽隊について用いて良ければ)でもって応えた。

当夜のプログラムできわめて効果的だったのは、間違いなく第3部の合同演奏であった。そこではコンツキのやかましいピアノ曲〈ライオンの目覚め〉を編曲したものが、エッケルト氏の指揮により演奏された。しかし私見ではいささかテンポが遅すぎた。最近、ヒルレマン Hirlmann 氏のピアノでこの作品を聴いた読者には、すぐさま同意していただけよう。次いで、メイレルス Meyrelles 氏の指揮でシュトラウスのギャロップが見事に演奏された。さらに先の日本人楽隊員の立派な指揮で、行進曲〈ナンシー・レオ Nancy Leo〉が愛情たっぷりに演奏され、コンサートは立派なクライマックスを迎えた。そして古きプロイセン国歌がこの愉快的な夜を陽気に締めくくった。

これほど多くの聴衆が集まったことは喜ばしいことである。リッチモンドの来月の南洋航海への出港前に、アフタヌーン・バンド・コンサートを開く予定とのこと、これも嬉しいことである。

*シェークスピア「ベニスの商人」第5幕1場。大山敏子訳